トゥーランドットの３つの謎について

生命科学科１年　S. K.

ヒロインのトゥーランドットは、自分と結婚しようとする者には必ず３つの謎を出し、それに全て答えられれば自分との結婚を、失敗すれば死を与えるのだという。作品中、第２幕、今回の挑戦者であるカラフもその謎に挑む。

今回は、このトゥーランドットがカラフに出した謎について考えようと思う。

まず一つ目の謎である。「暗い夜に虹色の幻が舞う/そして黒い無数の人々の上に翼を広げる/それは全世界が欲するもの/夜明けとともに消えるが/心のなかには消え残る/それは夜ごとに生まれ/朝には死にゆく」というものであるが、私はまずこれに「安寧」や「静けさ」といったものを解答としてあげた。私がずっと東京に住んだことしかないからかもしれないが、大抵物理的な「静けさ」は夜にしか存在しないと言っても過言ではないと思う。昼間にはほぼ 100%、人が出歩いているからだ。人の歩く音、人の喋る音、電車の音、車の発進音や走行する音等、雑音があふれている。「静か」とは到底言えない。まさに「夜明けとともに消えるが/心のなかには消え残る/それは夜ごとに生まれ/朝には死にゆく」なのである。また心理的な「静けさ」、即ち心の「安寧」は私個人としては比較的、夜に訪れることが多い。暗いこともあるからかもしれない。だが私は暗い所で見る月が好きだ。見ていると何故か心が落ち着くのである。これは、夜にしか訪れないものである。

次に二つ目の謎である。今度は「炎のように踊りはねる/だが炎ではない/時に凄まじく沸き起こり/情熱の熱と化す/無気力により衰え/敗北あるいは死により冷える/征服を夢みるなら熱く燃える/そこにはそなたが心さそわれる声があり/鮮やかな夕焼けの輝きがある」というものだ。これについては、講義内でも答えた通り「戦争」を解答としてあげる。私は戦争というものは経験したこともないし、起こそうと思ったことも起こす予定もない為に戦争を起こした者の考えなど分からないが、きっとその当事者たちには情熱をもって事に当たっているのだと思うし、「そなたが心さそわれる声があり/鮮やかな夕焼けの輝きがある」のだろう。そうでなければ、好んで戦争を起こす人びとも、それを続ける人びともないはずだ。また、「無気力により衰え/敗北ある

いは死により冷える」のは言うまでもない。戦争の終結は主にこんな理由だろう。征服の件も言わずもがなである。

　そして最後の三つ目の謎だ。「そなたに火をつける氷/それはそなたの火によりむしろ冷たさを増す/それは白くあり黒くある/そなたを自由にと望めばいっそう下僕となし/下僕とすれば王となす」と来る。これが個人的には一番難解である。確かにこの場合、カラフが「トゥーランドット」と答えたのも頷ける。敢えて違う解答を挙げるとしたら、私は「罪」を選ぼうと思う。まず「そなたに火をつける氷/それはそなたの火によりむしろ冷たさを増す」という部分であるが、前半はやはり背徳感が当てはまるだろう。なかにはその背徳感に陶酔し、何度も繰り返す者もいる程である。何らかのきっかけで「火をつけられる」者もいるだろう。また後半については、もともと「罪」が冷たいものと仮定すると、ある意味、連続殺人犯のような者のことを言うのではないだろうか。自分の背徳感、即ち「そなたの火」に焦がれ、さらにその火は強さを増す為、更に大きな罪に手を染めてしまう。罪自身は冷たいものである為、罪が大きくなるにつれて冷たさは増すのだ。次に「それは白くあり黒くある」という部分だ。罪にも様々な種類がある。例えば自分や人を守る為の罪である。正当防衛による殺人や、他人の名誉を守る為の嘘等がこれに当たるだろう。これは言うならば「白い」罪である。勿論罪は許されざるものであるが、情状酌量の余地があるものというイメージだ。一方「黒い」罪であるが、これには愉快犯や連続殺人等が当てはまる。最後に「そなたを自由にと望めばいっそう下僕となし/下僕とすれば王となす」の部分だ。まず前半部分であるが、罪から逃れようとした時、大概の人間はその罪の対価となる罰を恐れる。その罰を受け入れることの出来る人間の場合、この部分は当てはまらなくなってしまうかもしれないが、受け入れることが出来ない人間も多くいるということは事実だろう。実際、いまだに逃走中の犯人もいるのである。そういう者はある意味で、自分の犯した罪に「操られて」いるのではないだろうか。自分の罪への罰から逃げ、それと同時にその罪にどっぷりつかってしまう。精神面のみを見れば、全身が罪という鎖に雁字搦めにされているような状況である。それはまさに、罪に「下僕」とされた者の末路ではないだろうか。次に後半部分だが、これはほぼ言うまでもない。罰から逃げて、罪に「下僕」とされただけでなく、その精神をも飲み込まれてしまった者である。殺人鬼などはこの辺りに分類されるだろう。今でも語り継がれている様な殺人

鬼は、「殺人」という面に於いては一種の「王」となるのではないだろうか。かなり不名誉な「王」ではあるが、自分の罪を貫き通してしまった者という意味では、間違ってはいないと思う。

これで全ての謎に答えたことになるわけだが、きっとこれ以外にも様々な解答が出て来るはずである。事実、講義中にも解答者それぞれの解答がたくさん出てきた。それほどこれらの謎には解答が多いということだ。では何故こんなにも答えにくい、或いは当たりにくい謎をトゥーランドットは出したのか。これは簡単だ。当ててほしくなかったからだ。本人は結婚などしたくはなかったのだから当然のことである。では何故あの３人の博士風の役人は、打ち合わせでもしたかの様に同じ解答だったのだろうか。本当に打ち合わせが事前に有ったなら元も子もないが、もしそうだとしたらその役人は３人もいらないだろう。１人で十分なはずである。もし公平を期す為に複数人必要だというのなら、何故３人とも解答を書いた紙を出したのだろう。誰かが代表して紙を出せば良いのではないか。また、まったく違う見方も出来る。果たしてこの役人たちは本当に姫側の人間だろうか？そう考えると３人とも解答が同じだった理由も納得がいくのだ。

作品中でも見て分かるように、姫の父である皇帝やピン、ポン、パンの３人の大臣は、姫の今までの非情な行為を見て既に死人を出すのには飽き飽きしている。ピン、ポン、パン３大臣は何度もカラフ本人に挑戦を諦める様に直接説得している為、裏で動くとはあまり考えにくい。一方皇帝は、その地位の関係上もあるだろうが、カラフ本人に直接説得する機会があまりに少ない。一度、謎を解き始める直前に説得はしていたが、その１度だけだ。そこで、こうは考えられないだろうか。皇帝があの３人の博士風の役人に、カラフに解答を教えるよう仕組んだのだ。皇帝は国の長である。役人が首を横に振る事などほぼ無いに等しい。それに皇帝に仰せつかった仕事なのだからミスは許されない。ということは勿論３人の答えも１つとしてずれてはいけないわけだから、結局は同じ答えを３つ並べることになるのだ。では何故皇帝は愛娘を陥れる様な真似をしたのだろう。処刑を市民が娯楽と感じ始めている事は見ていれば分かる。国の長としては、そんな風潮は一刻も早く払拭したいだろう。また、自分の愛娘の結婚話である。今で言う所の「お見合い（相手はものすごいお坊ちゃま！）」で、娘が全て却下するどころか相手を虐殺している様な状況である。早く一段落付けたい

という気持ちも少しはあったに違いない。しかも、いくら愛娘の我儘とはいえ、他国の皇子を次々に処刑しているのである。心中穏やかであるはずがない。皇帝にとっては、早く決着を付けて悪いことは無いのである。

以上が私の考えた裏の事情である。これが事実である、とは思いたくないのが本心だ。ここまで書いておいて何をと自分でも思うが、この作品は所謂「愛は勝つ」イメージの作品だろう。そんな作品にこんなオチがあったとは、どうしても思いたくはないのである。

この作品はトゥーランドットがカラフに「愛」とは何たるかを教えられ、人間的に大人になって幕を閉じた。所謂ハッピーエンドである。オペラといったら「カルメン」や「トスカ」の様に悲劇で終わると思っていた私としては少し意表を突かれた作品だった。